

東方紅黒妹録

【紅魔】ラルア@黒き悪魔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレットの妹にして追放されし者

「ラルア・スカーレット」これはそんな彼女達

三姉妹の話です

あと不定期更新です

目次

第1章 「全ての始まり」

第1話 「追放されし者との再会」	1
第2話 「追放されし者の過去」	4
第3話 「悪魔の再りn：あ、あれ？」	6
第4話 「幻想の世界へGOO」	9
第5話 「買い物と新たな仲間」	12
第6話 「遊びフランVSラルア」	15

第1章 「全ての始まり」

第1話 「追放されし者との再会」

——ラルア・スカーレット——

彼女は吸血鬼族の末裔であった……姉が二人いるが知らず……自分が吸血鬼であることすら知らない

しかし……幼くして能力が危険と判断され家を追放されてしまう……
そして……今……彼女は……

人間「いくぞ！野郎ども！今日こそ吸血鬼を倒すぞ！」

一同「お——！！！」

育て親の人間とその仲間達と共に吸血鬼殺しに向かうところだった……

人間「お嬢ちゃんもくるのかい？」

ラルア「そうだよ……足手まといにはならないと思う……」

人間「はは！そりゃ面白い！期待しているよ」

ラルア「うん！」

こうして吸血鬼の館へと……向かったのである……

この時彼女は知らなかった殺しに行くのが自分の家族だということに……

——2時間後——（吸血鬼達の視点です）

レミリア「お母様、お父様きました……人間が……」

父「どうやらそのようだな……」

母「ええ……そうですね……」

父「レミリアお前はフランを呼びに行け俺らは人間達を迎え撃つ！」

レミリア「分かったわ……」

こうして父と母の下を離れたレミリアだった……

——最前線——

父「はあ……はあ……おのれ……人間に雇われたか！ダンピール風情が

…」

ダンピール「貴方達を倒すのが私の使命ですので…」

——10分後——フランを連れてきたレミリアは…

レミリア「うそ…なに…これ…」

フラン「お姉様こつち…」

フランが見つけたのは母と父の死体だった

レミリア「くツ…人間め…許さない…行くわよフラン！」

フラン「うん！人間倒す！」

そして最前線で戦うレミリアとフラン

人間「ぐわあああああ…」

レミリア「これで…あと残るは百人…」

フラン「そうだね…はあ…はあ…」

人間達「弱ってるぞ！いける！ん？嬢ちゃんどうs（ザクツ…」

レミリア「はあ…はあ…グングニルがあたったけど…何が…」

フラン「お姉様あれ！」

レミリア「あれは！」

そこには黒き翼をもつ少女がいた

人間「てめえも化け物か！」

ラルア「？なにをいつているんだ？私は…人間…」

人間達「やっちまえ！」（百人が襲いかかる）

ラルア「訳が分からないけど敵つことでもいいよね…じゃ容赦しない

『デスサイズ』

ラルアが出したのは自分の身長のおよそ四倍はあろう大剣だった

ラルア「消し飛べ！」

人間達「ぐわあああああ！（ザクツ…ザクツ…）」

次々に切られていった…

そしてラルア以外の人間は全員死んだ…

ラルア「はあ…血だらけ…」こんな感じ←

その時ラルアに近づいてくるものが二人…

ラルア「!?誰だ？」

レミリア「私はレミリア・スカーレットで、こつちが…」

フラン「妹のフランドール・スカーレットよ会いたかったラルア！」

ラルア「会いたかった？それに貴方は吸血鬼…グっ…？吸血鬼…？

レミリア…？フラン…？」

ラルア失われた記憶がよみがえる…

ラルア「……………レミリアお姉様…？フランお姉ちゃん…？」

レミリア「どうやら思い出したようね…」

ラルア「会いたかったよお〜」（泣）

そういつて抱き着くラルア

フラン「私達もだよ」

こうして彼女達は再会した――

ここから彼女達の物語が始まる――

第2話 「追放されし者の過去」

では…話をしよう…

これは…今から…1億年…いや…100年ほど前のお話…

母「あなた生まれたわ!」

父「おおそうか!名前は どうする?」

母「ラルアにしようと思います」

父「いい名だ…レミリア、フラン妹のラルアだぞ」

レミリア「妹ね…ラルアかわいい…:~:~:~:」

フラン「いもーと?」

レミリア「そうよフランもお姉ちゃんになったんだよ」

フラン「ふーんよろしくね!ラルア!」

この時は誰もあんな悲劇が起こるとは思いもしなかった…

ラルアが生まれて丁度100年悲劇がおきる…ラルアが暴走し龍を呼んだ…

ラルア「うおおお!いでよ我が最強眷族にして破滅の龍!『エクリプス』」

そして…エクリプスは破壊の限りを尽くした…(眷族とかメイドとか200人ほどが犠牲になった)

ラルアはというと…

ラルア「アハハハハハハハ!ハッ!ハハ…:~:~:~:」(バタツ)

力尽き倒れたのだった…龍はラルアがあらわれたと同時に消滅したのだった…

そして目覚めると…

ラルア「なんだこれ…!?え…:~:~:~:なんでみんな死んでるの?」

父「お前がやったんだ…ラルア!」

ラルア「うそ…:~:~:~:」

父「だがお前を殺したくはない…やむを得ん…ラルアの記憶を消去しその後追放しろ!」

ラルア「え?まつて!お父様あああ!!」(記憶を消されるラルア)
父「どこかで強く生きなさい…」

レミリア「お父様…ラルアはどうしたの？」

父「追放した…やむを得ずな…」

レミリア「そんな…」

父「すまない…分かってくれ…これもラルアのためなんだ…」

フラン「…：…：…ラルアには…もう会えない？」

父「分からない…だが…ラルアなら外でも生きていける…だから
きつとどこかで会える」

フラン「うん！フラン信じてる！」

こうして黒き悪魔、ラルア・スカーレットは家を追放されたのだつ
た…：…：…

——ラルアもといエクリップスが及ぼした被害は尋
常ではなかった——

…：…：…
眷族及び眷属、メイド合わせて300人以上の者が犠牲となった

ラルアから逃げ途中で殺されたのがほとんどだがなかにはラルア
を止めようと戦った者もいたらし…：…：…

だが…黒き悪魔と黒き龍の前になすすべなく殺されてしまったと
いう…

それから父、ヴェリナード伯爵は復興作業にてをいれたという…

——そしていつそうレミリアとフランの修業に力を
いれたという——

…：…：…ラルアと共に人間達が攻めてくるあの日まで
…：…：…

第3話 「悪魔の再りn…あ、あれ？」

レミリア「よく…戻ってきてくれたラルア…」

フラン「ねーねー久々遊ぼうよー」

レミリア「それは構わないけど…まずはかたづけしましょう？」

ラルア「そうだよお姉ちゃ…グっ…!!？」

フラン「ラルア？」

ラルア「お願い…離れて…」

レミリア「フラン！下がりなさい…」

フラン「でも…」

レミリア「今は見守ることしか…できない…信じましょ？ね？」

フラン「分かった」

そしてラルアから離れるレミリアとフラン

レミリア「万が一の事がある武器を出しときなさい」

フラン「…分かった…」

そうして『グングニル』を構えるレミリア『レーヴァテイン』を出すフラン

ラルア「グあああ?!ぬっ…ウウウに…逃げテ…」

レミリア「ラルア!!」

少しずつ狂気に支配されていくラルア…

レミリア「くっ…こうなれば…やりたくはないけど…」

『グングニル』を放とうとするレミリア

フラン「まって！お姉さまー！」

レミリア「フラン？」

フラン「私が止める！」

レミリア「で、でもフラン「お願い！」分かったわ…任せる…」

フラン「ありがと…あ、お姉さまもう一つお願い…」

レミリア「なに？」

フラン「悪いけど…ちよつとばかり寝てて？」

そう言つてレミリアに腹パンするフラン…

レミリア「ガっ…フ、フラ…（バタツ…」

いとも容易く気絶するレミリア…

フラン「ごめんね…お姉さま…さて…やりますか！」

て…あ、あれ？『レーヴァテイン』しまってますよこの人（人ではない）

フラン「ふふっ…えいっ！」

ラルアに飛びつくフラン…

フラン「えいっ！んっう…」

ラルアに口付けをするフラン、かなりがつり…

ラルア「?!?!ガアアアア?!?!」

訳が分からず混乱するラルア

ラルア「ガアアア!!!」

ようやく状況を理解したのか…抵抗するが…フランの力が強く逃げ出せない…それどころか舌を絡めてきた

ラルア「ガツガ…?!?んんっう!?!」

正気に戻ったラルア凄じ驚いた顔をする……

フラン「んんっ…ぷはあ…」

ラルア「はあ…はあ…」

ようやくフランが拘束を解いた

ラルア「お姉ちゃん…魔力吸ってたでしょ…」

フラン「そうだよ…ラルアの口の中…甘くて美味しかった…」

ラルア「ばっ…ばかあ…!!」

顔を真っ赤にするラルア

ラルア「でも…嫌いじゃなかった…それにお姉ちゃんも甘かったよ

…あと助けてくれてありがとう」

フラン「そう…どういたしまして今度はちゃんとしたときに…ね？」

その時…

レミリア「うっ…うーん…あっ…あれ？終わってる？」

フラン「あっお姉さまお目覚め？」

レミリア「ええ…ラルア大丈夫？」

ラルア「大丈夫！お姉ちゃんのおかげ！」

レミリア「よかった…さて…ラルアも戻ってきたことだし掃除の続きよー」

フララル「おーーーーー!!」

——一件落ち着いたのであった——

第4話 「幻想の世界へGOOO」

掃除の途中

「そういえば…フラン、ラルア『幻想郷』って知ってるかしら？」
フララル「幻想郷??」

姉の問いに同時に答えた二人
「そう言うと思ったわ…説明してあげる」

少女説明中

「なるほど…楽しそうなところ！」
はしやぐフランと

「ふむふむ…で行き方は？」
冷静なラルア

「あ！行き方はねえ…」
(以外反応が予想の反対だった…)

そんなことを思ったレミリア
「親友の魔法使いに連れってもらおうの！」
パチエですね分かりません

「はやく！はやく！」
「落ち着きなさいフラン…」
「んー私が室内とかかたづけしとくからお姉様はその魔法使い連れてきて」

恐ろしく冷静なラルア
これあれだ着いたら発狂するパターンだ
「分かったわかたづけお願いね」

飛び去るレミリア
「さてさてさーてやりますか！」
張り切るラルアフランはというと…

「Zzzzzzzzzzz」
発狂し疲れたのか…寝ていました…
(しようがないなあ…お姉ちゃんの部屋まで運ぶか…)

数分後

「連れてきたわ」

「お姉様お帰りなさいで、そちらは？」

「パチュリー・ノーレッジよパチエとでも呼んで」

魔法使いが名乗る

「私はラルア・スカーレットよろしくね！パチエ」

「そういえばフランは？」

レミリアが問う

「ん？お姉ちゃんなら部屋で寝てるよ」

「そう…」

同時刻フラン

「ラルア？ラルア？」

(来ない…つまり近くには誰もいない…)

「あああああ!!ラルアに！妹にお姫様抱っこされた！腕温かったな

…寝たふりって悪くない！今度はお姉様にしてもらいたいなあ

…………お姉様…帰ってきたでしょ多分……………行くか…」

自分の部屋をでるフラン

「じゃあパチエお願いするわ」

「任せてレミィあと図書室でいいのよね？」

「ええ…」

うなづくレミリア

「…………私いないよね？」

立ち去ろうとするラルア

「あー好きにしてていいわただし館は出ないでね」

「はーい」

そうゆうと猛スピードでどこかへ行った…

少女移動中…

「ここが図書室ね…図書館くらいあると思うけど…まあ始めましょう
！」

ラルア

「うーん屋上はいいねえ…」

——フラン——

「あつ…図書館いこ」

「そろそろ行けるわ」

「あつお姉様いた!」

「起きたのねフラン一応自己紹介しなさい」

「フランドール・スカーレットですよろしく」

「パチュリー・ノーレッジよろしく…じゃ行くわよ『幻想郷』に『移動魔法』《ルーラ》」

館全体が少し揺れる

「ついたの?」

「ええ…そのはずよ」

《ぎゃあああ!!》

「なんか聞こえなかった?」

「屋上の方から…まさか!?!パチエラルアを呼び出して!」

そう『幻想郷』は今昼である『太陽』が出ている

「!?はいはい…『メザイア』」

すると若干焦げたラルアでできた

「し、死ぬかと思った…」

レミフラ (ドジだ…だがそこがかわいい)

——その後回復魔法で治りました

第5話 「買い物と新たな仲間」

「むむ？ここは？大図書館か？」

目を覚ますラルア

「お、起きた」

「なんで屋上にいたんだか…」

心配そうな顔するレミリアと反応が冷たいフラン

「そんなことより！買い物行きましょう！」

「!？」

いきなりレミリアが買い物行こうと言いだした

「あーじゃあお姉様とお姉ちゃんで行ってきて私まだ動けそうにな
い」

因みに嘘である一番下の配慮だろう

「そう…分かったわフラン行くわよ」

「はーい」

こうして姉二人は出かけたのだった…

「さて…行かせたのはいいものの…暇だな…む？」

外から強い「気」を感じたラルア

「行ってみるか…とその前に『太陽拒絶』」

太陽で焼かれないよう魔法をかけてから外の門に向かうラルア

———
吸血鬼移動中

「ここになにようだ？」

「貴方が『スカーレット家』当主ですか？」

謎の女が聞いてくる

「残念ながら当主は姉だそして今留守だ」

「そうですか…手合わせしたかった…」

悲しそうな顔をする女

「…丁度私も暇なのだ私でよければ相手をしよう…退屈はしないはずだ」

「いいんですか？」

「ああ…」

「では…お言葉に甘えて」

「こいー」

構える両者

———
そのころ人里では

「見て見てフラン！あの服可愛い！」

「お姉様はしやぎすぎ落ち着きなつて…」

「そんなお姉様好きだけど…（ボソツ

「ん？なんか言つた？フラン？」

「え？なんでもないよ」

誤魔化すフラン

「それより早く帰らないとラルアに悪いよ」

「はっ！そうだった…！」

（くそもう少しフランといたいてもラルアも捨てがたい…よし今度は
3人でこよう」

心の中でそう決意するレミリア

「じゃ帰りましょうかフラン」

「はーいお姉様」

（今度はラルアと行きたい…）

フランもフランでそう思っていた

———
紅魔館

「やるね…」

「そちらこそ…」

ほぼ互角だった

「これで決める黒符『断罪の刃』」

「いきます！光符『華光玉』」

どーーーん

「ひゅーここまでとはね…お姉様達以外で私の腕を消し飛ばしたのは
あんたが初めてだよ…名前は何？」

もちろんのごとく腕を再生しながらいうラルア

「あ、ありがとうございますえーと……………名前…ないんです…」

□ごもりながらいう女

「まじか!?なら私が名を与えよう…」

「ほんとですか!?!」

「ああ…そのかわり…ここ『紅魔館』で働く気はないか?」

「…是非!というか手合わせして従者になるのが目的だったんです!」

「それを先に言えよ…まあいい…名前は…『紅美鈴』などどうだろうか?…当主はお姉様だからお姉様の『紅き悪魔』からとって」

「紅美鈴…ありがとうございます!」

「とりあえず中に…お姉様達の帰りを待ちましょう…」

…

「はい!ラルア様」

中に入っていく二人

—————
今ここに紅美鈴が誕生したのであった…

第6話 「遊びフランVSラルア」

「はえー広いんですねー迷いそうです…」

「まあ…ね…うーんそれはなれだなー」

ラルアは館内を美鈴に案内し丁度1周し玄関に戻ってきた

「お姉様達まだかなー」

ガツチャ…「ただいまー」

「ん…おかえり」

「おかえりなさいませ」

「ツ…誰!？」

身構えるレミリア

「申し遅れました今日からここで働かせて頂く紅美鈴です名前はラルア様に頂きました」

「ラルアに?」

「そつ…私が見つけた」

「…ふーん」

「ここですよやく声をだしたフラン

「とりあえず荷物おいてくれば?」

正論である

「それもそうね…フラ…てっはや!？」

——20分後

「とりあえず自己紹介ね私はフランドール・スカーレット」

「私がレミリア・スカーレットよ」

自己紹介する二人

「宜しくお願い致しますお嬢様、妹様」

「ねえ…ラルア、お姉様…!」

「うん?」

「なにフラン?」

「遊びたい」

「…」

沈黙する二人

「……悪いけど美鈴について私には仕事があるの…ラルア頼んだわよ…
ついてらっしやい美鈴!」

「はい…お嬢様」

こうしてレミリアと美鈴が離れた…

「えーでお姉ちゃん普通にやればいい?」

「そうよ…久々に楽しみましょ?」

「いいよー久々にやるか…」

外にでる二人（今夜え?時間たちすぎ?しらない）

——レミリアの部屋

「美鈴よく見ていなさいあの子たちの戦いを」

「はい……………」

「いくよー?禁忌『クランベリートラップ』」

「……闇符『サタンの招来』…」

相殺である…

「……弾幕やめない?お姉ちゃん」

「そうだね…禁忌『レーヴァテイン』ラルアいつもの大剣?」

《カシウス》

「いいや…違うよ…神槍『真紅の大槍』」

ラルアの手の中に槍が造られていく

「新しい武器?お姉様のグングニルがモデル?」

面白そうという表情をして質問してくる

「うん…正解…!じゃあいくよ!」

突っ込みラルア

「たあっ!!」ぶんっ

「あぶなっ!」

持ち前の身体能力で避けるフランだが…こんなことを考えていた

（明らかにやばい…!あの槍ただものじゃない…!）

「ならっ…はあああ!!」

攻めに入るフラン

「うわつととと…せいっ!」

レーヴァテインをカシウスで防ぐラルアそして…

「今っはぁぁ!」 きんっ

レーヴァを弾き飛ばす

「!? あー負けたか…」

大人しく負けを認めるフラン

「よしっ!」

大満足なラルア

——レミリアの部屋

「うわぁお…二人ともやるわねえ…」

「そうですね…特にラルア様の『カシウス』が一番驚きました」

この二人も関心していた